つく舞の舞手～
2人のジュウジロウサン

夏の夜空のもと、高さ15メートルの柱の上で舞う白装束に雨蛙（あまがえる）の面の男。その見事な舞いに歓声が沸く。野田のつく舞です。ジュウジロウサンと呼ばれるその舞手を昨年まで16年間務めていた岡田真吾さんは、その役を江田和輝さんに託すことになりました。

平成5年に、県指定の無形民俗文化財となった野田のつく舞では、「ジュウジロウサン」と呼ばれる白装束に雨蛙の面をかぶった演者が、高さ15メートルの柱、先端の一斗樽、そして柱から張った綱の上で命綱無しで演舞を行います。

毎年7月の三ケ町夏祭り中日に行われるこの祭事には、雨乞いの意味があるとされています。

「愛宕神社年暦」によれば、享和2（1802）年に野田町と山崎村で行われたのがはじまりとのこと。

昭和に入り地元での舞手を欠き、龍ケ崎などから舞手を呼んで行っていましたが、昭和63（1988）年、下町の鳶（とび）職、倉持和紀さんが待望の地元出身のジュウジロウサンとなりました。

わずか2か月の練習での引き継ぎ

平成12年、ジュウジロウサンを11回務めた倉持さんは体調を理由に後継者を探し始めました。

倉持さんとは、日ごろからお付き合いがあった岡田真吾さんが、ジュウジロウサンとなることが決まったのは、25歳の時でその年の5月。

「野田の生まれで祭りと言えばつく舞。子どものころから見ていて、ジュウジロウサンへの憧れはあった」という岡田さんですが、「本番まで本当に短く、2か月くらいしか練習の期間はありませんでした」しかし「とりあえず、1回練習させてください」と言った岡田さんは、その1回目でジュウジロウサンとしての基本的な動きをこなしていきました。見ていた野田津久舞保存会の方々は、運動能力の高さに驚かれたそうです。

しかし、それはあくまでも身体能力の話。倉持さんや野田津久舞保存会の方々の指導により舞の完成度を高めていき、演技を務めあげました。

それ以降、演技の細かいところまでさらなる磨きをかけながら、27年までの16年間、ジュウジロウサンを務めてきました。

柱が建っているのは、練習柱も含め年に40日ほどですが、それ以外の時も、体重管理と、イメージトレーニングを行っていたそうです。

伝統を受け継ぐ努力

岡田さんのジュウジロウサンを見て、後継に名乗りを上げたのが江田和輝さんです。

「やりたいと思って、研修生となるまではとんとん拍子だったのですが、それからが大変でした」と江田さん。「最初は全然できなくて、家の中に綱を張り、そこで3年間逆上がりの練習をしました。鉄棒とは

岡田真吾さん